

門下ノ闕を發し、田宮宮津敦賀七尾を経て
豊後直岐に近じ敦賀又は七二へ直航船駛る
も其れより上流狀木又、新潟、兩館
小樽と經て再び樺太へ直航し雄津、元山
を出、之終て門下ノ闕に歸着す
乙種は門下ノ闕を發し釜山、元山、
海州を経て小樽又は(兩館)へ直航し
小樽、小樽、小樽、小樽、小樽、小樽、

多治見といふ人は、三月安齋守の主人であるといふ。今まで吉川民都左衛門といふ神影の無病者がありましたが、病死いたしました。これと相當なものを一人指所番として、さし送られるやうな名處へ御沙汰なう安齋守が之を名義に心得て、家中のもの、中一人

れて居るものでなければ、富家の邸にもなる
といふことで入札をいたして、岡札の士族が
のものを買公の御指圖賣に事まつらんこゝ
のでも、オ大札をして開くと、見果し重左衛
門が百三十八人、廣瀬重蔵が七拾五枚、成瀬
が五拾九枚、大川入右衛門が五拾枚といふ入
札も拾一月の拾五日に若見廣成、大川


[illegible]

なさいますから見物の人たちは驚いしむわ
らをするものもございせん大川八右衛門
が若衆の容姿を見て重左衛門といふ奴は
公好だ連も俺は呼はん何うせ けるなら
ひ思ひをするだけつせらない早く食てし
とう願もないのに八右衛門が打込んでく

「何うも岩見は大層な　のだ大川／＼は小豆／＼の
のぼた／＼たつた一本で勝負がついた諸人は全
夏のごとく威風凛々をいたしませんでした
たのが廣瀬重蔵、関田の　を取つて出て
ました大島流の　術の達人ヤツト中股

「アハハハ俺が此の廣瀬を打ち込むのは尤も安
けれども此のものも、尊を重太郎が大奮勇で
むて居る。流石に親子の情合、重太郎を憎ひ
どもに俺を恨んで居る。だからう、打つては安ひ
之は相打ちにしてやらう。さう考へました
らう。つて突出す廣瀬の、先をボン／＼
拂ひ上げながら能く肩口をうかつて先方

だから悦こんで下る此の度は威風凛々たる
力を携へて立出ました若見は矢張り威風
凛々が重太郎に殺されて居るから之も勝べ
度があれば相打にする者かへつてヘコ、
相打にしても最初の一人り打込んで居る
と勝とさまつて居る立合を威風凛々小手を
らして駒の面へ這入らせして相打であらう



大正其服店

契約起案民酒訴
律事務ヲ取扱フ

護士皆川廣濟

業務擴張

町 七 字 屋 本 店
町 十 字 屋 第一支店
町 十 字 屋 第二支店
町 十 字 屋 第三支店

卸小賣共大割引販賣

家屋は新築清潔
眺望は風光明媚

勉 旅 館

取扱は親根丁寧
三浪津河岸 龜屋

清樓正 櫻魂

赤組の活動

赤組運送部
赤組旅客手
赤組便利部
赤組葬儀部

赤組本部
赤組本館